

# チベットに対する元朝の宗教政策

矢崎正見

## はじめに

12世紀の末、全モンゴール部を統一したテムチン (Témoutchin) の率いる蒙古帝国は、アジアの殆んど全域から、西はロシア・ドイツ・ポーランド・ハンガリー等のヨーロッパ東部に亘る一大帝国を建設した。

そして、この蒙古民族による大元帝国の完成は、これと直接的交渉を持ったチベットの歴史に幾多の影響を残したのであるが、本稿においては、その交渉の実態、そのよって来れる所以、それがそれ以後のチベット史に与えた影響等について考察しようとするものである。

## 1. 元朝成立への道

### 成立史

1162 (あるいは1155) 年<sup>1)</sup>、外モンゴールの

オノン (Onan・斡難) 河流域に生まれたチンギスカン (Tchinguiz-khan・成吉思汗) は諸部の統合を完了し、1189年、28歳で部族連合の長となり (第一次即位)<sup>2)</sup>、更に1206年、全モンゴール民族の長として正式に合罕の位に即いたのである<sup>3)</sup>。チンギスは1227年、66歳で死んだが<sup>4)</sup>、その王位はオゴタイ (Ogotai・窩闊台・太宗) によって継承され<sup>5)</sup>、更にその後三代目に当るクビライ (Coubilai・忽必烈・成祖) の代となり、1260年 (中統元年)、南宋を併呑して中国統一を完成し、国号を大元と称し、中国歴代王朝の系列に編入されたのである。が、クビライ以後、代を数えること10代、わずかに100余年、王朝は朱元璋 (明の太祖) の明に代り、元朝最後の帝王順帝は明の將軍徐達、常遇春等によって北に追われ、再びその民族発生の草原の地に戻ったのである。

### 系 図<sup>6)</sup>



## 遠征史

元史太祖紀の末文には「聖武皇帝，廟號太祖，在位二十二年。帝深沈有大略，用兵如神。故能滅国四十，遂平西夏。」とあり，独りチンギスが平定した部族，国家が40の多きにのぼるのみでなく，征服帝国としての元朝の輝かしい歴史はその遠征史ともいえるべく，以下に元史・秘史等に記されている遠征の次第を記そう。

(1) チンギスは諸部をその権力下に収めると，先ずタングート (Tangoute・西夏) 征伐を開始した (1207・1211)。

(2) ジュルチェン (Djurchin・女真) 族の建てた金国攻略。初めての城郭国家との戦闘を経験した。この攻略戦によって耶律楚材 (1190-1224) が投降した (1210-20)。

(3) 中央アジア・イラン・アフガニスタン戦役 (1219-)。

(4) ヨーロッパ遠征 (1219-25)。エルワジ (Mahomond Yelouadj) の投降 (1221)。

(5) 小アジア・ロシア遠征 (-1225)。

(6) 第2次西夏討伐。途上チンギス死す (1227)。

(7) 太宗治下の第2次ロシア遠征 (1236-40)。

(8) ポーランド・ドイツ・ハンガリー遠征の結果，ヴォルガ河下流のサライ (Sarai) を首都とするキプチャク (Kiptchac) 汗国の創設 (13世紀中葉)。

(9) 第1次日本遠征 (1270)。

(10) 第2次日本遠征 (1283)。

(11) 元朝滅亡 (1367) 後もアルタン (Altan・俺答・1507-81) 汗は1530年代から帰化城によって明の辺境を侵すこと数十年に及んだ。

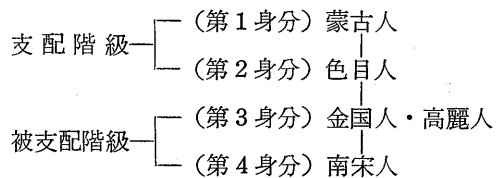
## 文化的諸形態

元朝は征服王朝として，少数の蒙古人によって広大な土地と異質のしかも数多い諸民族を支

配しなければならなかった。ここにおいて，その政治・文化のあらゆる面で蒙古民族中心主義を強力に推進しようとした。もとより，蒙古・元朝歴代の皇帝をはじめとし，各部族の首，貴族達はその大部分<sup>7)</sup> が文化的には低俗であり，漢字・漢文学を解さなかった。そして，寧ろこの事が理由となって，ウィーグル (回鶻・トルコ系) 文化を仲介として，西方文化の採用が容易に行なわれたのである。

そして，その結果，漢民族に対しては，軍事力において優れている点と，西方文化に接しているという自信をもって，その征服者としての地位を確立しようとしたのである。が，もとより，漢文化との接触が全く無かった訳ではなく，13世紀初めに亡命して来た金人・キタン<sup>8)</sup> (契丹) 人等を通しての漢文化の蒙古民族に対する浸透も行なわれ，統治形態には中国方式も多く採り入れられ，資治通鑑・貞観政要・大学衍義補等が蒙古語訳され，元末に到っては，蒙古民族至上主義も漢文化におされて消滅したのであった。

蒙古民族至上主義の現われとして，元朝で行なわれた階級制度に注目しなければならない。



元朝には，降伏の前後によって，治下の人民の待遇を異にする風習があって，このような階級制度の成立を見たが，支配階級の蒙古人・色目人は任官，科挙，法律的罰則等の上で優遇され，被支配階級たる金国，南宋の人々は高位につくことが殆んど不可能であった。

また，第2階級の色目人とは，旧ホラズム (Khorazm・花刺子模)・旧ウィーグル (Uighur

・回鶻), 旧ナイマン (Naimans・乃蛮), 旧タングート (Tangoute・唐古特)<sup>9)</sup>, その他の主としてトルコ・イラン系民族を主とする西域諸国・諸部の人々を諸色目人 (すなわち種類多き外国人の意) と呼ぶのであるが, 蒙古人・色目人を中心とするこの階級制が必ずしも成功を見た訳ではない。すなわち, 支配階級に属する権力者の中から, 平章政事の職にあったアーメッド (Ahmed・阿合馬) やウイーグル出身で財務大臣として瀆職を恣いままにしたサンガ (Sanga・桑哥)<sup>10)</sup>等の悪名高い権臣の輩出を見, 一方, 元来, 商業民として活躍した色目人の重用と元朝の中国統一によって, 陸上幹線と海上幹線とを結ぶ世界的貿易路が完成された事とが, 元朝の重商主義となって現われ, 商業資本の重圧は一方的に農民に加わり, これに支配階級の政権争奪と天災等も原因となって, やがては河南における農民一揆を招来することともなり, 4代皇帝憲宗の治世を最後として元朝は分裂への道を歩むこととなったのである。

蒙古民族が信奉した宗教の形態は, 遊牧民族として当然の事であろうが, シャーマニズムであった。1206年, クリルタイ<sup>11)</sup> (Cairiltai・総会議) で行なわれた太祖第二次即位の時の汗号, 成吉思はシャーマン, ケケチュ (Gueukdjou・闊闊出) の神託によって附せられたものである。その後, 世祖の代となって, ラマ教も行なわれるようにはなったが<sup>12)</sup>, 元代では, ラマ教の信奉者は上層階級に限られ, これが蒙古民族一般庶民の間に浸透するのは明代に入ってからであり, 膨大な大蔵経の蒙古語訳を生み, 多くのラマ・活仏が現われ, 学問寺と称せられるラマ廟の建立を見, 更には, チベットを媒介としてインド文化の蒙古に対する浸透が行なわれたのは, 後代, 清朝のラマ教全般に対する保護政策の結果であった。

## 2. チベットと元朝との交渉

チンギスの即位年次 (1206年) から元朝の滅亡 (1367年), 順帝の退位 (1370年), そして明の永楽帝成祖の即位 (1406年) までの間のチベットの歴史にあっては, その殆んどが, やや顕著な事件を除いて, 国内の詳細な動きについては不明の儘に終わっている。今, この間のチベット史の年表を拾って見れば,

- 1288 プトン (Bu-ston) の出生
- 1320 ナルタン (Snar-than) 古版の成立
- 1322 プトン仏教史 (Chos-hbyun) の述作
- 1346 テブマル (Deb-ther dmar-po) 成立
- 1357 ツォンカパ (Btson-kha-pa) 出生 (-1419)
- 1391 初代ダライ, ゲンドゥン (Dge-hdun-grub) 出生 (-1475)

14世紀末  
|  
15世紀初      ツォンカパの改革

- 1410 北京版 (永楽版) 完成

等で, 200年近い年月の間に, 10件に満たない出来事がチベット史, 特に仏教関係の歴史の上に現われているに過ぎない。更に, この間の歴史事実を, 単に仏教関係だけでなく, 社会一般の事件をも含めて, その記載が他の史書類に比して, やや詳細と思われる パサムジョンサン (Das 校訂本 Dpag-bsam-ljon-bzan : p. 158~p. 162) の記述に求めると,

・1201年. タルタル (Tartar) の征服者チンギス (Chin-ges) によるチベット・中国等の征服行なわる。

・王族間の闘争により, 共倒れの混乱が招来され, チベット王の何人かに対する暗殺がなされた。

・1239年. サキャパ (Sa-skya-pa)・ツェルパ (Tshal-pa)・ディゴンパ (Hbri-goñ-pa)・パグモドゥ (Phag-mo-gru-pa) 等, 興起す。サキャ

王朝の興起とそれに伴うチベット本土に対する宗主権の確立（1253年～74年）。この時、チベットは13州に分割され、その州はティコル（*khri-skor*）と呼ばれ、それぞれの支配者はティポン（*khri-pon*）と称せられ、統治が委任された。

・ティポン、ダルマタク（*Dar-ma-grags*）の支配下において、ツェルワ（*Tshal-ba*）派興起す。

・ディゴンパの興起と、ヤルド砦（*Yar-ḥbrog-btsan-rdsor*）の建設行なわる。

・ミニャク（*Mi-ñag*）のゲグ（*Rgyal-rgod*）の子孫による支配行なわる。

・パクドゥ（*Phag-gru*）派の興起と、チベットの最広範地域におけるその宗主権の確立。

・パクドゥ派の保護下におけるラギャリ（*Lha-rgya-ri*）侯国の建設、ならびにリンブン（*Rin-spuñs-nor-bzañ*）・ツォケドルジェ（*Mtsho-skyes-rdo-rje*）・ドンユドルジェ（*Don-yod-rdo-rje*）・ガクワンナムゲ（*Nag-dban-rnam-rgyal*）等の間での意見の不一致による衛・蔵両地方における首長達の争い。

・1239年、ホルドルタ（*Hor-dor-rta*）によるルワデン（*Rwa-bsgreñ*）とゲラカン（*Rgyal-lha-khañ*）の建立なる。

・1267年、サキヤ派統治下、クンザンス（*Kun-bzañ-bsod*）によるチャロクゾン（*Bya-rog-rjoñ*）の建立。

・1285年、サキヤ派とディゴン派との間に争いあり、ディゴン派はコータンのタルタル部（*Stod-hor*）の軍隊の助けによりサキヤを占領、サキヤ派は元朝（*Se-chen-rgyal-po*）の息、*Thi-mur*）の助けにより、これを撃退す。

・衛・蔵両地方にパクドゥ派の勢力広がる。

・1289年、リンブン（*Rin-spuñs-nor-bzañ*）の反乱と、サムドゥツェ（*Bsam-grub-rtse*）の

砦の占領、およびリンブンによる独立の宣言と主権の確立行なわる。

・1338年、衛の北部と南部の争いあり、ネドゥンワ（*Sneḥu-gdoñ-ba*）の占拠により、パクドゥ派は首都を移転す。

以上の記述はこれを細かく検討すれば、多くの問題を含んでいるが<sup>13)</sup>、兎も角も、派閥の抗争と宗派の興起・寺院建立の歴史ということが出来よう。そして、これは教団側についていえば、1042年入蔵したアティンヤ（*Atiṣa*）の思想的影響を受けたゲルク派（*Dge-lugs-pa*）・カーギュ派（*Bkaḥ-brgyud-pa*）・サキヤ派等の各派が生まれ、一方、一般社会では、9世紀中葉のランダルマ（*Glañ-dar-ma*）の破仏後、統一王朝を失い、戦国時代的な様相を呈するに至ったチベット国内で、地方豪族や諸領主はその確執の中に各宗派や大寺院の持つ宗教的権威を利用しようとし、また、諸宗派もその教勢拡張の一手段として、地方豪族の武力を裏楯とすることが一般的風潮であったことの現われであり、チベットが元朝と交渉を持つに至ったのは、正にチベット史におけるこのような時代であったのである。

そこで、元のチベットに対する介入、チベットと蒙古との交渉の実態であるが、ここにはフーラン（*Hu-lan*・稲葉・佐藤共訳本119頁以下）・テブゴン（*Deb-ther-sñon-po*, *Roerich* 訳本 Part I 215頁以下）・ジグメ蒙古史（橋本校訂本34頁以下）等、主として、チベット・蒙古の資料によってそれを探ることとしよう。

『ドゴン、パクパ、ロドゥギェムツェン（*Hgro-mgon Ḥphags-pa Blo-gros-rgyal-mtshan*）は乙未（1235年）に生まれ、年9歳の時、伯父（サキヤバンディタ・*Sa-skya Pañḍita*）に随行して北方に行き、後、皇帝クビライ・*Go-pe-la* がルベイチェン（*Lu-paḥi-ṣan*）に居た時、北方の王子

モンゴル (Moñ-gor) とラマパクパとは共に行き  
 行って謁見しようとした。そこで、[クビライは]  
 喜んで北方の王子のもとへ、モンゴルの 100 騎  
 の一団を行かせ、サキヤ (パクパ) を迎えた。  
 [パクパはクビライに] 灌頂を与え、檀越とし、  
 [クビライはパクパを] 帰依処としての交わり  
 が結ばれた。セチェン (Se-chen・クビライ)  
 が王位に即いて後、[パクパは] 国師、帝師と  
 順次に進み、[元] 帝国の教主となった。……  
 弟、ガタク、チャクナドルジェ (Mañh-bdag  
 Phyang-na-rdo-rje) は己亥 (1239年) に生まれ、  
 年 5 歳の時、伯父に随って [北方へ] 行った。  
 王子ゴタン (Go-tan・闊端) は [彼に] モンゴ  
 ルの服を着せ、ブンモ・メガルン (Dpon-mo  
 Me-hgah-luñ) を [妻として] 賜わり、全チベ  
 ットの支配を命じた。』(Hu-lan)

『サキヤパンチェン (Sa-skya-pañ-chen, Kun-  
 dgah-rgyal-mtshan) の孫に当るラマパクパ (Bla-  
 ma Hphags-pa) は 18 歳にして癸丑 (chu-mo-glañ  
 1253年)、クビライ (Se-chen) 太子の国師とな  
 った。……26 歳、庚申 (lcags-pho-spre 1260  
 年)、クビライが帝位を継ぐに及び、帝師とな  
 った。……己巳 (sa-mo-sbrul 1268年) 元の帝  
 室に向い、7 年間をそこに過した。……(以下  
 は Hu-lan と殆んど同文) 皇帝クビライの許可  
 によって、チベット 3 州がパクパ (Dpon-po  
 Hphags-pa Rin-po-che) の教化の褒賞と認めら  
 れて以来、ラマが国家の精神的指導者となり、  
 一方、官吏は次々に任命され、国家の俗的な事  
 柄を取扱うようになった。はじめに、摂政達の  
 うちで、サキヤザンポ (Sa-skya bzañ-po) がク  
 ビライの命によって衛と蔵を統治すべき公的な  
 印璽を与えられた。……[サキヤザンポの腹心  
 の侍従として、その死後活躍した] クンガザン  
 ポ (Kun-dgah-bzañ-po) はクビライの命のも  
 と、蒙古の軍隊によって殺害された。……結

局、サキヤパは 75 年間に亘って世間主となつた  
 のである。』(Deb-ther)

『クビライの第 3 王子チンゲム (Chin-gem) は  
 前にクビライ在位中の丙子 (1276年) の年、法  
 王パクパがチベットに帰還した時、サキヤに伴  
 われたが、父王クビライは大いに喜び、これに  
 灌頂せよと命ぜられ、チンゲムはサキヤの地に  
 留った。……[蒙古のチベットに対する進攻の  
 事実について]……チンギスは 66 歳の丁亥 (1227  
 年)、チベットのミニャク (Mi-ñag, 西康省、  
 カム地方) に軍を進め、その第九王ドルジェペ  
 (Rdo-rje-dpal) なる賢者を招いて、多数の民衆  
 をその権力下に摂めた<sup>14)</sup>。……チンギスよりク  
 ビライに至る間、順次に征服した諸部は青き蒙  
 古の 40 余万戸と、赤き支那、黒きチベット、黄  
 なるセルタドゥ (Ser-tha-grvol) と白きソロン  
 グ (So-lon-gwos, 高麗) であり……、仏陀の涅槃  
 より、2041 年を経過したラブチュン (rab-byuñ)  
 第 4 の丁卯 (1207年)、この世の梵天法王、聖  
 武チンギスはチベットの衛地方より蔵地方に使  
 者を送り、大薩迦派の尊者クンガニンポ (Kun-  
 dgah-sñin-po) に清浄の供養を行ない、衛・蔵  
 より三依処を請来した。それ等に対し、一般蒙  
 古人は不断の信仰を獲得し、供養をなし、戒を  
 具する比丘等を出した。而して、これ蒙古にお  
 ける正法のはじめなり。……成吉思汗の孫、ゴ  
 ダン汗は薩迦班禪を迎え、蒙古に教法を弘める  
 ことを欲し、ダルハンタイジトルタ (Dar-han-  
 thañ-tsi-tor-ta) 大將軍を従者とする使者とし  
 て送り、班禪を招聘した。……ラマ 65 歳の丙午  
 (1246年)、蘭州大城に到着。……パクパ 19 歳の  
 時 (1253年)、クビライは教法を弘通するため、  
 パクパをその宮殿に迎え、……パクパは可汗な  
 らびに妃ゼマサンモ (Mdses-ma-bzañ-mo) に灌  
 頂を授け、……妃はチベット方面のもろもろの  
 事柄はラマの言に従い、干渉することなく、命

令もすること勿れ、その他の大小の事業についてはラマは介入する勿れといい、……灌頂の供物として、チベットの三地方、および支那の大人間界を贈り……此の大自然者は大可汗の帝師となり、……年、20歳にして寅の年(1254年)、僧侶の家に王の使臣を泊らせぬこと、站役を賦課せざること、税金を課せざること等を願った。……〔以下、パクパ以後、サキャ派所属のラマ達が元朝に招かれて、可汗に灌頂を授けた事例は多く記されている。〕(Hjigs-med)

以上を要約すれば、パクパとクビライの交渉、パクパとクビライの妃ゼーマとの交渉、すなわち、灌頂授戒↔国師・帝師号の授与、チベット3州の支配・宗主権、また、ゴダンとサキャパンチェン・チャクナドルジェの交わり、チンゲムのサキャの地への招来等、チベットと元朝との交渉の内容は元朝とサキャ派との宗教的交流とそれに伴う政治的・社会的権益の授受に集約することが出来るのである<sup>15)</sup>。

元朝がチベットに出兵した事実については、わずかに、チンギスのカム出兵があるが、これも註記の如く、チベットに対する直接的な出兵とは考えられず、又、上述のパサムの記述の如く、サキャ派とディゴンとの交戦における支援のための出兵はあったにしろ、チベットに対して直接これを攻略するための、少なくとも大規模な出撃が行なわれたことは元史を初めとする中国側資料にも記録されて居らない。とすれば、元朝のチベットに対する交わりの形態は、武力を伴うものでなく、専ら、一教団——サキャ派——に対する懐柔という宗教政策によるものであった事は自明の事柄となるのである。

### 3. 元朝の政策とその後世への影響

かつて宋を滅ぼし、高麗を侵略し、日本に出兵し、西方、ヨーロッパに向ってはロシヤ、ポ

ーランド、ドイツ、ハンガリー等の国を脅かした強大な武力を有する蒙古帝国元朝が、隣接の小国チベットに対しては、その武威を用いず、宗教政策による懐柔の方途をもってした。その理由は第1に既に明らかなる如く、当時のチベットはチベットという国土のみは在っても、そこに全一的な統治権がなく、従って、言葉の厳密な意味でのチベット国は存在していなかったともいえるのであり、チベットの国土に対する地域的侵略は在り得ても、チベット国そのものを服従させるという事はあり得なかった事になるのである。

第2に、そのようなチベット地域における現状の中で、宗団各派と、豪族相互の勢力争いがそれぞれの宗派と豪族の相互協力という形で、熾烈に展開されていたのであるから、その集団中最も強力なものに対して裏楯となって、その勢力の伸張を単に援助するという姿勢だけを取り、自らの武力は最小限度に発揮するに止め、その勢力の完成が殆んど完了した時点で、これを傀儡として利用することは、侵略の最善の方法であったのである。

第3に、元朝の統治者は本来遊牧の民であり、その文化的レベルは極めて低く、大元帝国を完成した元朝当事者としては、文化的向上を意図した事は当然であろう。が、最も身近な中国の文化、すなわち、思想としては中国仏教、儒教、道教等をそのままの形で元朝に採用する事は征服者としての矜持が許さなかったであろう。

一方、色目人あるいは契丹人の耶律楚材あるいはウィーグル文化等との接触によって、西方文化の受容はあったにしても、それは主として実利的な物質文化の面を主としたものであった。ここにおいて、元朝が精神文化の向上の上でラマ教に眼を向けた事も当然の仕儀である

う。13世紀当時におけるチベット仏教は上述の如く、アティンシャの入蔵後、復興の一途を辿り、宗派仏教の完成を見た時期であり、その持つ呪術的性格も、元来シャーマン信仰によって支えられた蒙古民族の心情に容易に訴え得るところを持っていた。この事が元朝とサキャ派との交流を可能とした一因であったのである。

かくて、チベットに対する元朝の宗教政策は元朝滅亡後も、チベット民族と蒙古民族の親交という形で残り、更にそれが単なる民族的親交に留まらず、チベットの内政に大きな影響を与えることとなったのである。すなわち、ツォンカパの宗教改革、それに伴う新教黄帽派の成立という歴史を経たチベット仏教教団は、更にツォンカパの法灯を継ぐゲルク派の中から、ダライラマ (Talahi Bla-ma, 達頼喇嘛) を生み、チベット全域 (衛・蔵・西康の三地方) に亘って、政治と宗教の両面における最高権を具備する活仏親政の政治形態を作り上げたのであるが、第3代ダライ、ソーナムギャムツォ (Bsod-nams-rgya-mtsho) と蒙古王アルタン (Al-thang-gen・俺答汗)、第5代ダライ、ロサンギャツォ (Nag-dban Blo-bzan-rgya-mtsho) とグシュリ (Ku-sri-ge-gen・固始汗) との関係等に見られる如く<sup>16)</sup>、ダライラマ制の確立には蒙古民族の武力が大きな裏楯となって直接働いたのであった。

しかも、アルタンと5代ダライの交流の如きは、元朝におけるセチェン・クビライとパクパとの結びつきを過去における歴史事実・因縁として想起しつつなされているのである<sup>17)</sup>。

チベット仏教史上では、ツォンカパの宗教改革はその仏教史を新教と旧教に二分する契機となる重要な出来事であったが、このツォンカパの改革後成立したダライラマ制は単にチベット仏教界を支配する重要な制度であるばかりでな

く、チベットの俗界政治を体系化する重大な組織であった。

ランダルマの破仏以後、統一王朝の存在を失ったチベットにおいて、途中、サキャ王朝の成立は見たものの、15世紀末から16世紀中葉にかけて成立したダライの制はその後のチベット史を形成する重要な要素であったが、法灯の上からは改革者ツォンカパの系譜を引くとはいえ、単に一般民衆に訴える宗教心情のみの所産ではなく、蒙古民族の強力な武力を裏楯として存続し得た点に注目する時、その蒙古・チベット両民族の提携を容易とした元朝のチベットに対する宗教政策は、チベット史の後代に対する影響という面からも重視されねばならない。

#### 註

- 1) チンギスの生年は明らかでないが、元史・源流等が等しく歿年を「歳次丁亥 (1227年)、享年六十六歳」とするところから逆算すると1162年となる。が、死亡の年齢については Rashid-ud-Din の Jami'ut-Tevārikh (年代紀彙集) の72歳説、楊維禎の正統弁による60歳説等、色々である。従って、死亡年次の1227年から、さまざまな逆算が行なえるが、ここには上記の諸説を紹介するとどめ、一応、1162年生誕説に従い、その正否は究めない。
- 2) 蒙古源流卷三「年至二十八、歳次己酉、於克魯倫河比郊、即汗位」とあり、元朝秘史 (那珂通世訳註成吉思汗実録卷三) には「阿勒壇、忽察兒、撒察別乞等議り合ひて、帖木真に言へらく『汝を罕と為さん。帖木真を罕となさば、我等は多き敵に先鋒に奔りて、……』かく言を定め合ひて、これより盟して、帖木真を成吉思合罕と名づけて、罕となしたり。」と記している。
- 3) 元史本紀には「元年丙寅、帝大会諸王羣臣、建九旂白旗、即皇帝位於斡難河之源。諸王羣臣、共上尊號、曰成吉思皇帝」とあり、実録卷八には「かく毛氈の帳幕ある国民を平けて、虎の年、斡難河の源に聚会して、九つの脚ある白き纛を立てて、成吉思合罕に罕の号をそこに奉れり。」とある。
- 4) 源流卷四「歿於圖爾黙格依城、時歳次丁亥七月

十二日。享年六十六歳。」とあり、元史太祖紀には「臨崩、謂左右曰『……』言訖而崩。壽六十六。」とあり、実録卷十二には「猪の年、成吉思合罕は上天に昇り給ひぬ」とある。

- 5) 実録卷十二「鼠の年（1228年・太宗43才）、察阿歹巴秃を首とせる右手の諸王、斡惕赤斤那顔、也古、也孫格を首とせる左手の諸王、拖雷を首とせる内地の諸王・公主・駙馬・萬戸千戸の官人等、眾となりて、客魯艘の闊迭兀阿喇勒に咸く聚りて、成吉思合罕の名ざし給へるその勅に依り、斡歌歹合罕を罕に戴けり。」
- 6) [I]の太祖から[IV]の憲宗までは、いわゆる蒙古帝国の創草期であり、(1)の世祖から(11)の順帝までが元朝歴代の帝王である。なお、大括弧〔 〕内の数字は生存年次を示し、小括弧( )内の数字ではそれぞれの帝王の在位年次を表わす。
- 7) 英宗硯徳八剌は在位年数、僅かに3年であったが、その間に漢文化を尊重し、孔子の子孫を優遇する等の挙に出た。また、文宗図帖睦爾はその在位中、好学の志厚く、学者を優遇し、經典を修し文運を隆昌ならしむることに努めたが、この両者は歴代帝王中の例外的存在であった。
- 8) 契丹人の中では、1215年、金の中都（北京）陥落の折、投降した耶律楚材がその代表的存在といえよう。彼はチンギス（太祖）・オゴタイ（太宗）の両皇帝に仕え、蒙古帝国に金国の駅伝制たるジャムチ（站赤）の制を紹介し、蒙古朝に対する貢献度高く、のちには東方領域における最大の指導者として仰がれた。
- 9) 投降の順位からいえば、ウイーグルが13世紀のはじめ、ナイマンが1204年、ホラズムが1220年、タングートが西夏国の滅亡時で、1227年となる。
- 10) 彼等の行跡についてはD'Ohssonの蒙古史第3編・第3章に主として、Djami' ut-Tevārikh (Raschidの年代紀彙集)を資料として、詳しく述べられている。
- 11) 蒙古の民族的決定はその初期の段階においては、総てCouriltaiで行なわれた。Couriltaiの構成は王侯・貴族・戦士により、その主たる決定事項は汗の選挙・ジャサ（Jassa 札撒）と呼ばれる法令集の決定、侵寇・遠征の協議等である。Couriltaiは本来、蒙古民族間の民主的協議機関であったが、後には単に汗の意志を承認するものと代り、やがて世祖の代となって廃さ

れたのである。

- 12) 世祖Coubilaiが1269年、国師Hphags-paに命じて作らせたパクバ文字は有名であるが、このパクバ文字は蒙古語の書写に不便であり、一般には回鶻のUighur文字を蒙古語の音写に便なるよう改めたものの方が広く用いられた。
- 13) この時期におけるチベット国内の様相ならびに蒙古諸部・元朝との交渉等について、その詳細を全般的に知るためには、チベットで撰述された各種の史書、中国側の諸文献等をそれぞれ対比して詳しく検討しなければならないが、チベット側の資料と元朝等に関する中国側の資料ではその記述の態度が基本的に異なる。すなわち、前者にあっては仏教を基礎として教法の流伝とチベット仏教各宗派の発展を記述することに重点を置き、後者においては、中国国威の顕揚をその中心課題とする。そこに、この種の歴史の変遷の実態を探る上での困難さが存するのである。ここには、両者の資料を対比して総合的、平均的に結論を得ようとするより、寧ろ、その概要を浮彫りにすることのみを主眼とした。
- 14) 1227年はチンギスの没年であり、秘史の記述によれば、この年、チンギスが第2回目の討伐を行なった直接の目標は唐兀惕（タングート・党項）であった。
- 15) チンギスがクンガーニンポに供養を行ない、一般蒙古人の中から信仰者を出し、受戒の比丘も出、これが蒙古における正法の初伝というジグメの記述には問題がある。秘史にもこの事は記されて居らず、ジグメの記述中にもチンギスがクンガーに供養したのが1207年とあり、同じくクンガー出生を1092年とし、死亡を1158年としている点とも矛盾する。
- 16) 拙稿「ダライラマ制に対する一試論」（大崎学報110号）参照。
- 17) 橋本本：ジグメナムカ199 p.~200 p.

## 資料類

〔元史〕

明の朱濂・王禕等編、1369年明初に編纂され、紀47・表8・志58・列伝97の計210よりなり、本紀は元朝歴代の実録によって編せられた。その後、中華民国の時代に大統領令によって正史に加えられた〔新元史〕（柯劭忞編、紀26・表7・志70・列伝154・計257）もあり、正史とし



て欠くことの出来ない資料であるが、正史中、元史は他の宋・遼・金等と共に極めて杜撰なものといわれる。

## 〔元朝秘史〕

蒙古民族最古の文献で、チンギスの先祖よりオゴタイの即位12年までの事実に関する記録。全12巻(正10・統2)。著者未詳なるも、オゴタイの治下に成り、1240年頃書写され、明の洪武帝初年、原本が漢訳された。別名を Altan Depter (金冊) といい正10巻はチンギスの伝記。蒙古の歴史・文学・語学等の研究上、重要な資料。邦訳に那珂通世“成吉思汗実録(1904)”・白鳥庫吉“音訳蒙古元朝秘史”(1943)・小林高四郎“蒙古の秘史”(1941)・“元朝秘史の研究”(1954)等がある。

## 〔蒙古源流〕

明末・清初の内蒙古オルドス部の貴族出身、セツェン・サナン・タイジ、1774年(清乾隆42年)の著。蒙古原文を漢訳して皇帝に捧げたもの。3巻以下に蒙古民族の歴史を記し、特に明代については蒙古側資料として、明実録と共に重要資料である。I.J. Schmidt の独訳・江実の和訳あり。

## 〔Altan-tobchi〕

黄金史・金宝史等と呼び、1630年頃、ラマ僧による作といわれるが、著者不明。内容は伝承・

説話等により、王統の歴史を中心に、オイラート部と東部蒙古との交渉等にふれる。ラマ教的色彩強し。小林高四郎“アルタントブチ蒙古年代記(1939年)”がある。

## 〔皇元聖武親征録〕

1260年～85年の間に編纂され、1263年頃、蒙古資料から漢訳されたものと推定されるが、内容はチンギス汗実録である。

## 〔Jami'ut-Teräsikh〕

イルカン国の史家 Rashid-ud-Din が勅によって1303年、編纂したもので、“集史”・“年代紀彙集”と訳される。原文はペルシャ語で書かれ、L.N. Berezin が1858年～88年に訳したロシア語訳本がある。ドーソン“蒙古史”に引用されている。

## 〔蒙古史〕

C. D'Oshson: “Histoire des Mongols” 4巻。1834年～35年編。昭和11年～13年、田中萃一郎の邦訳本が岩波文庫で出版された。

## 〔チベット文資料〕

- a) Bu-ston: Chos-ḥbyuñ. 1322年
- b) Kun-dgaḥ-rdo-rje: Hu-lan-deb-ther. 1346年
- c) Gshon-nu-dpal: Deb-ther. 1476年
- d) Sum-pa-mkhan-po: Dpag-bsam. 1741年
- e) Jig-med: Hor-chos-ḥbyuñ. 1819年